

【実践報告】

地域の視点で対象理解を育む「看護の基盤実習Ⅰ」の取り組み 第25回日本赤十字看護学会学術集会交流セッションを通して

三輪 晃子, 今井 多樹子, 宗内 桂, 篠原 謙太, 水馬 朋子
村田 由香, 門田 清孝, 川畑 貴寛, 高田 洋介

Ⅰ. はじめに

2022年度のカリキュラム改正（厚生労働省, 2019）を受け、日本赤十字広島看護大学では、実習のスタートラインとなる基礎看護学実習でこそ、学生が病院ではなく地域に出向き、地域で生活する人々を理解し、コミュニケーションの在り方を学ぶことが必要と考え、「看護の基盤実習Ⅰ」という新たな実習を開始した（今井, 三輪, 2024）。本実習では、週1回の実習体制の下で、現地（病院・診療所の外来部門、小学校、地域サロン、地区踏査）での実習に加えて、実習最終日に報告会を行った。この報告会に向けて、学生は、実習グループでの協働学習により、互いに学び合う中で、コミュニケーション能力を高めるなど、学習上の好循環を体験した。

これは、実習グループにおけるチームビルディングの重要性を示唆している。そこで、第25回日本赤十字看護学会学術集会（交流セッション）では、地域から始まる新しい「看護の基盤実習Ⅰ」の有用性を学会参加者と共に共有するために、本実習を終えた学生による実習最終日の報告会の様子を再現し、本実習による学修成果を報告した。

Ⅱ. 実習方法

「看護の基盤実習Ⅰ」（1単位, 45時間）は、表1に示す実習目的と実習目標に基づき、1年次後期に週1回小学校、病院・診療所、地域サロンに出向き、残りの2日は地区踏査と実習のまとめ・報告会を行う、のべ5日間の実習であった（表2）。

表1 実習目的・実習目標

実習目的	地域という幅広い視点から、施設（小学校、病院・診療所、地域サロン）の健康支援活動を通して、地域で生活する人々の生活環境・状況（生活習慣、価値観、信条、生き方、社会的役割を含む）が健康に及ぼす影響について、個々の成長発達過程と発達段階の特徴および健康課題を踏まえて対象理解を深める。これにより、ヒューマンケアリングに基づいた看護を実践する上での地域で生活する人々を理解するための基礎的能力を養う。
実習目標	<ol style="list-style-type: none"> 1) 地域で生活する人々とのコミュニケーション（対話）を通して、その人々について理解したことを述べることができる。 2) 看護を学ぶ者として倫理的に行動できる。 3) 地域で生活する人々の成長発達過程と発達段階に応じて、生活環境・状況（役割を含む）が健康に及ぼす影響について述べることができる。 4) 地区踏査を通して、その地区の健康課題について述べることができる。 5) 施設の健康に関する役割・機能について人的・物理的環境を踏まえて述べることができる。 6) 学生としての学ぶ姿勢を養うことができる。

表2 実習日程・実習内容

実習日程	実習内容
第1週（1日目） ） 第4週（4日目）	小学校、病院・診療所、地域サロン、地区踏査：各3時間 学内まとめ・カンファレンス：3時間
第5週（5日目）	実習最終日のまとめ・報告会（学内） ・プレゼンテーション ・最終個人面接（評価）

学生は4名編成のグループとし、午前中は実習担当教員の同行なしに現地実習を行い、午後は大学に戻って実習担当教員と実習カンファレンスを行った。実習カンファレンスでは、学生の実習体験を意味付け、実習担当教員の助言を受けながら学びを深め、学生間で共有した。5日間という短期間の実習であるが、学生には日々の実習記録や総括的な課題レポート以外に、複数の課題が課せられた。例えば、小学校では児童のキャリア教育の一環として「私の進路（看護を志した理由）」を発表した。地域サロンでは、クイズやゲームなどを学生が企画・運営した。病院・診療所では、患者とコミュニケーションを取りながらバイタルサインの測定を実施した。さらに、実習最終日の報告会に向けて、地区マップ（図1）の作成に加えて、ラベルワーク技法による学習成果の可視化（図2）と発表の準備に計画的に取り組む必要があった。

Ⅲ. 実習の成果

「看護の基盤実習Ⅰ」において、現地での実習のみでなく複数の課題があることで、学生はインプットされた学習内容をアウトプットする機会を得た。さらに、実習グループでは実習最終日の報告会に向けて、ディスカッションしながら資料をまとめるこ

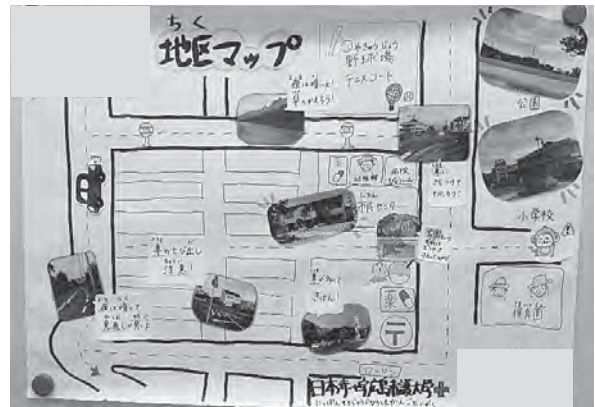


図1 地区マップ

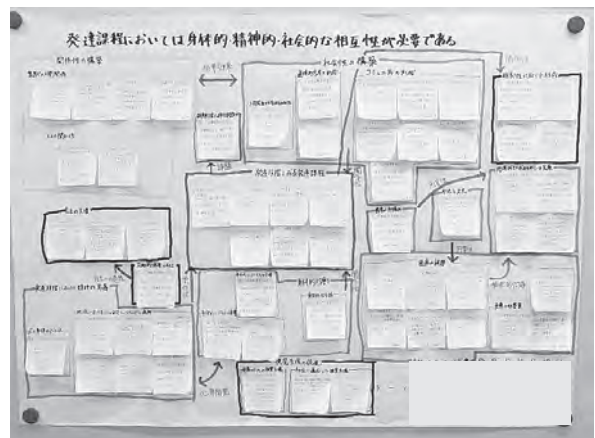


図2 ラベルワーク

表3 学生の発表内容（要約）

1) 地区マップ（図1）

私たちはA地区の地区踏査を行いました。A地区は今から48年前に分譲が開始され37年前に入居が始まりました。この地区には、小学校と保育園があります。また、医療機関としては、内科・泌尿器科と歯科、薬局があります。

次に地区踏査を踏まえて地区の健康課題やニーズを考察していきます。この地区はおよそ30年前に入居してきた人が多く、高齢化が進行しています。また、老年期の発達課題として退職を機にそれまでのコミュニティから外れ、新たなコミュニティの形成が必要とされます。地区の観察を通して、実際に地域とのつながりが希薄化したり、地域とのコミュニティから外れている人を見受けられました。高齢者の一人暮らしや高齢夫婦のみの世帯が多い地区であることを踏まえると、このような現状は高齢者の引きこもりや孤独死といった問題が発生しやすい状況にあり、認知機能の急速な低下も引き起こす可能性があります。

また、高齢者のケアを優先した結果、地域の将来を担う次世代の育成や子供たちへの身体的・文化的発達に向けたケアが未熟になってしまう傾向にあります。さらに医療機関が少ないこと、一人暮らし、高齢夫婦二人暮らしの世帯が多いことから、緊急時に受診できず、孤立する高齢者もでてきてしまうといった課題があります。以上のような課題を解決するためには、高齢者だけでなく、子どもへの支援といった次世代の育成も重要視した地域運営をすることが必要です。

2) ラベルワーク（図2）

私たちは地域で生活する人々の発達段階と成長発達過程に重点を置き、地域の保健・医療・福祉についてのラベルワークを行いました。ラベルワークのタイトルは「発達過程においては身体的・精神的・社会的な総合性が必要である」としました。今回、特に注目をした学童期と老年期について述べていきます。

学童期では小学校での集団生活を通して、人とのコミュニケーションを図り人間関係構築の練習を行うなど、集団意識の確立がなされます。加えて学童期では、自立に向けた段階であり、小学校では役割と承認の段階を組み込むといった支援の工夫が行われていました。

次に、老年期では発達課題として今までのコミュニティから外れた状態であるため、新しいコミュニティを形成し自身の社会的意義を見出すことが挙げられます。

これらを踏まえて、私たちは地域の課題として次の2つを挙げました。1つめは引きこもりや孤独死が増える可能性があるということです。このことはQOLの低下や認知機能の低下または、介護負担の増大につながる恐れがあります。

2つめは、若い世代の育成が未熟であるということです。この問題に対応するためには、地域の将来を担う若い世代の育成や子どもたちへの健康面への支援が必要であると考えました。多様性をすべてカバーしようとすると、医療費がさらに増大する可能性も否定できません。個別性に応じた医療の提供と、医療問題の解消のどちらを優先すべきか、私たちはこの問題を地域における医療の倫理的課題としてとらえました。

3) まとめ

私たちは、発達過程には身体的・精神的・社会的側面の3つが不可欠であり、それぞれが互いに作用し合って形作られていくものであると考えました。ラベルワークの結果から、今回の実習で、地域で生活する人々とのコミュニケーションを通して健康課題やニーズを考察し、発達段階や成長発達過程を踏まえて対象理解を深めることができたと考えます。私たちはこれから様々な健康課題を抱える人々と関わることになります。そこで、地域で療養生活を送ることになった人々に対してケアを提供するときに、人々の身体的・精神的・社会的要素を含めた生活環境を理解しておく必要があります。その人がどのような地域で生活していて、どのようなニーズを持っているのか、それらを理解してこそヒューマンケアリングの概念であるあらゆる健康レベルの人々の尊厳を気遣い、その人の求めていることを適切に、かつ個性に合わせた援助や支援を行うという看護が実践できると考えました。

とで、アウトプットする作業を繰り返し、互いに学び合う中で、理解を深め、学修の定着につながっていることが考えられた。そこで、令和5年度に「看護の基盤実習Ⅰ」を終えたグループの中からモデルとなる1グループを選定し、交流セッションにおいて実習最終日の報告会（地区マップとラベルワークによる実習のまとめ）を再現（図3）、学生の学修成果を他大学の教員と共有した。表3は、学生の発表内容をまとめたものである。

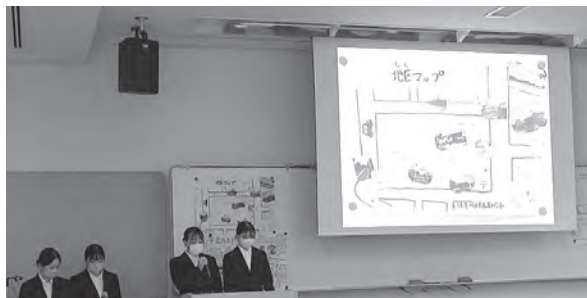


図3 実習報告会の再現場面

Ⅳ. おわりに

我々教員は、学生の本実習に取り組む様子から、個人はもとより、実習グループの協働下で、実習目標達成に向けた複数の課題に対して能動的かつ計画的に取り組むことで主体性が引き出されたと考えて

いる。このように、学生の主体性を引き出し、学生主導の実習を支えていたものは、週1回の実習体制、1グループ4人という少人数制での協働学習、実習報告会に向けた資料作成、実習報告会でのプレゼンテーションという仕組みといえる。本実習では、この仕組みにより、学生の対象理解力とコミュニケーション力の基盤形成をもたらし、学修成果の好循環を生み出したことが考えられた。さらに、今回の交流セッションにおいて、報告会の再現により、その学修成果を、学会参加者と共有しディスカッションする中で、実習グループの協働学習の重要性と、チームビルディングの醸成が、学修成果に大きく貢献していることに気づくことができた。学生の学びを引き出し、学生主導の実習を成功に導く上で、実習の展開上の仕組みと実習グループにおけるチームビルディングの醸成は不可欠といえよう。

引用文献

- 今井多樹子，三輪晃子（2024）．学生主導の実習を成功させるために必要なこと 地域の視点で幅広い看護の対象理解を育む「看護の基盤実習Ⅰ」の取り組み．看護教育，65(2)，194-199.
- 厚生労働省（2019）．看護基礎教育検討会報告書 令和元年10月15日．<https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf> [2024/12/18閲覧]